若手研究員として大学教育について思うこと

Thinking of education in a university as a post doctoral fellow

飯山一平
IIYAMA Ippei

はじめに

私は、二〇〇二年四月より、日本学術振興会の特別研究員として、北海道大学大学院農学研究科において仕事をさせていただいており、学位を授かってから三年目、教育を受ける側からようやく仕事をする立場になった。一方で、学術振興会特別研究員という制度の趣旨に、「我が国の学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者を育成するため、(以下略)」とあるように、私自身、いまだ、育成の対象であるともいえる。そのような者が、教育というものについて意見を述べるまでには至らない、とも思われたが、及ばずながらも一つの事例を示すことができるならば上々、と自らを慰めた。わずかばかりのものとは承知の上で、お役立ていただき、また、ご指導ご鞭撻を賜ることができれば幸甚、と思う次第である。

育成徒然

育成されている立場から見た場合に、最も教育効果を享受できる点は、安定かつ自由な時間に尽きる。私の身分は、学術振興会との間に雇用関係はなく、原則として人生一度きり、期間は三年間限り、ということで不安定なものだが、逆に、この三年間に限れば安定かつ自由な時間を持っているのだ、という見方をするほうが前向きだ。私は、幸い現在の職場環境に恵まれていることもあり、研究生活を送る上でのほぼ全ての面での自由を享受させていただいている。期間終了後のことを考えないとは言えないが、考えても仕様のない部分もあると割り切れば、三年間の自由に対する安心感から仕事にも精が出る。教育効果として、主体的に物事に取り組む姿勢を培うことを期待する場合には、高い自由度を与えることが必須だと思う。特に、仕事の初期段階では、技量を上げていくにしても、仕事を軌道に乗せるにしても、時間のかかるものだからだ。

育成する側の立場から見た場合について。二年目からは、四年生が一人、一緒に仕事をすることになった。一年目からではなく二年目からであったことは、自分の仕事が軌道に乗り始めていたことから、お互いにとって有利に働いたと思う。研究指導者の先生には、良い采配をいただき感謝するばかりだ。四年生だった彼は、私と一緒に仕事をすることが決まった段階で、当然、私と指導教官を一にすることになり、これも有利に働いた。彼の課題は、彼の意見を折々入れながら、研究室の抱える仕事の中から自然に与えられたと思う。野外調査主体の課題であった。

元来彼には主体的な気質が見られたため、一緒に仕事をする上で、これを妨げないようにつとめた。現場や実験室で私から彼に伝えることのできたものは全て、私自身が学生院生であった頃に実験や野外調査の技術として教えていただいたものであり、実際にやって見せていただき、見よう見まねで身に付けたものばかりだった。説明をし、手本を見せて、実際にやってもらう、という一連の手続は、重要である。野外調査は主に新緑の季節から晩秋まであり、この間、最低一週間に一度は一緒に出歩いたことから、卒業研究についての会話が長く途絶えることはなかった。結果としてほぼ常に、彼と私とは互いに、仕事の現況を把握できていたと思う。積雪後は室内試験が主となり、一緒に出歩くことはなくなったが、それぞれの仕事を同じ実験室で行っていたため、折触れて様子を確かめることができた。

仕事についてこちらから水を向けても芳しい反応がない場合には、今は彼なりに考えているところなのだろう、と待ち続けるようにした。自由の尊重と放任との境は、判断の難しいところだが、彼との間での時間的な約束は、野外調査に出かける時の待ち合わせ時刻以外は、ほとんどしなかった。あるとすれば、夕方一緒に一杯やりに行くか、というくらいのものだった。大学に居なければ当然会話はできないが、たまに雲隠れすることもまた、大切な時間だと思う。彼は、能力が高かったこともあり、答えのないまま沈んでいって

北海道大学大学院農学研究科 (Graduate School of Agriculture, Hokkaido University)

キーワード：主体性、研究教育活動の自由度

しまうことはなかった。これは、先輩としては得がたい幸運だった。

仕事から得られた結果を形にしていく過程で、彼から議論を求められたときには、これを優先した。議論の時間に、制限はつけなかった。議論によって、それまでそこに存在しなかったものが出現することは、おそらく本当だ。また、議論において先輩が、教育的効果等を意図して作為を施す必要は、全くない。ただ、彼が自分で発想した事柄について評価をし切れていないと考えられた場合には、これを評価する方向へ話を運ぶようにした。彼の仕事の内容や、彼自身について、私自身の下す評価が必要と思われた場合には、明確であることを心がけた。お世辞などは全く言わない代わりに、良いと思った時には、はっきり、良いと言うようにした。

彼の努力の甲斐あって、彼自身の手になる卒業論文が仕上がった。彼が将来どのような道に進むことを決意するのかは、私にはわからない。また、研究を通じて手に入れた知識や技術が、社会に出て直接役に立つ機会は限られるかもしれない。しかし、仕事を立ち上げてから、目的に合う方法を工夫考案してこれを遂行し、得られた事柄から自分の責任においてある判断を下してまとめる、という一連の作業を、彼が自分の手で行ったことは、確実に有意義であったと信ずる。

この一年間が成功に終わったのか否かは、彼も結構、面白がってやっていたように思え、肯定したいところだが、断言はできない。しかし、少なくとも私自身は恩恵を受けることができた。後輩は先輩に教わり、先輩もまた、後輩から教わる、というところだ。先輩としても、大学や大学院で身に付けた知識や技術については、これを持っているだけでは意味はない。これらを、自分の仕事においてどのように活かすか、が肝心であることは言うに及ばず、さらに将来を考えるときには、これらを伝える営みをもって後輩を育成することが、義務といわれる以前の自らの要求と思う。

振り返って

私の指導力の問題は別にしても、伝える側である先輩としては、大学の先生方に比べて時間的な制約がほとんどないという贅沢な条件であったにもかかわらず、その結果として漸く一人の若者の卒業に立ち会うことができた、という印象だ。新しい概念やものを造り出すこと、そしてある技術を習得することには、一定以上の時間と手間がかかることは必定だ。大学や大学院においては、やはりある程度、養成することのできる人材は少なくならざるを得ないと思う。

一方、現在の大学、大学院は、研究そのものおよび研究者養成機関として結果を求められるのみならず、主に経済界からの要請が原因と思われるが、種々の産業に向けて即戦力を持った人材、さらには再教育を施された社会人をも含めた、人材の大量供給が期待されている。高度な技術を備え、かつ自分で考える主体的な人材を多く育成するべく、合理化、効率化を追及せよ、という要請がこれに続く。しかし、若者が主体性を培うことを真に望むのであれば、合理的な方策ばかりで解決することはできない、と思う。主体性を培うためには、実地にこれを繰り返すことが必須と考えられるが、最も自分に責任がかかり、主体性が要求される状況とは、合理的な判断材料に乏しく、未来を決めるためのさいころを自分で振る決意をする時である。合理的効率的に考えることは、既定の路線の上を走る時に特に力を発揮するものだ。これは、自分でない他の人が同じ状況におかれても同じような判断をする可能性が高いということであり、またそれゆえに、大勢の人間の共通意識を形成するために役に立つ。しかし、主体的に未来を作ることは、既定路線が存在せず先が見えないからこそ可能であると考えれば、合理性効率性の追及だけからこれを行うことは不可能であろう。

若者が、先が見えなくともさいころを振る決意をする為に必要なことは何か。自分の中の理想と、僅かな可能性にも賭けることのできる勇気、そして、さいころを振ったのちに現れるであろう不確かな未来に対しての楽観などが考えられる。これらの要素は、教育を受ける側が、置かれている環境に対して信頼感を持つほど、大きくなると思われる。親の背を見て子は育つ、ということだろう。大学院を取り巻く環境が不安定なのは、農業土木に限った話ではなく、厳しい状況である。しかし、そうであっても頼りになるのは、心に危機感を抱いてはいても、自分の仕事に自信を持って打ち込み続ける先輩たちの姿だろう。もし、進学してきた学生たちに向かって「諸君は、非常に良い選択をしました」と、自信たっぷりに語ることのできる先生がいるならば、それが、一番の教育につながると思う。